

3/11の東日本大震災に際し発生した原発事故現場へようやく千葉工業大未来ロボット技術研究センターの小柳栄次副所長らが開発した日本製ロボット「Quince クインス」がお目見えした。“彼”の「仕事始め」は6月10日であるから震災発生から実に3ヶ月も経っているが、実は1ヶ月前から米国が無償供与したキネティック社の「タロン」やアイロボット社の「パックボット」が投入され、瓦礫の撤去や放射線量の測定を行ってきたことは周知の通りである。

ロボット大国であるはずの日本からの参入が遅れたのにはいくつかの理由があるが、中でも特に注目に値するのが政治的理由だ。実は日本政府は1999年に茨城県東海村の核燃料加工会社 JCO で臨界事故が起きた後、原発災害用ロボットの開発に着手、2002年には三菱重工業がキャタピラー付きロボット「MARS-1」を開発していたのだが、2003年に小泉政権が「原発は安全で事故は絶対起きない」という理由により全て廃棄されていた。

これを聞くと、先の大戦における役に立たなかった戦艦大和や、敵を発見するレーダーなどを軽視した当時の軍事政権を思い出す。いくら技術や知識を高めてもその目的や使命がハッキリしていなければ無意味なのだ。聖書の

詩篇 111 篇 10 節には

「主を恐れることは、知恵の初め。これを行なう人はみな、良い明察を得る。」

とある。知恵とは、「物事の道理を判断し処理していく心の働き」と国語辞典にあるが、つまり神・キリストこそが知恵の根源であり、この方に立ち帰る時我々は“活躍できない者”ではなく“生かされた者”となる。今こそ、キリストを信じて知恵を得よう。

